

I 地域営農が持続的に発展するための仕組みづくり

1 桜島地域の人・農地プランを活用した地域営農のしくみづくり

1 対象

桜島地域認定農業者17名，中心経営体22名，鹿児島市畜産連絡会桜島支部員11名
柑橘ハウス振興会164名，桜島大根生産農家24名
H28年度電気柵事業導入者

2 課題を取り上げた理由

- (1) 桜島農林事務所管内の人・農地プランは作成されているが，農業者の認識が低いので，周知徹底と改善に向けた意識啓発が必要である。また農地に対する生産者の意向調査，重点2地区の遊休農地・施設の実態調査を基に検討した結果，農地の維持と耕作放棄地対策として放牧と栽培環境改善に取り組むことが重要である。
- (2) 平成26年度から狩猟免許（わな）取得者の確保支援や栽培環境改善支援を行ってきた。平成28年度も引き続き，農業者がほ場に設置する柵等について適切な設置，管理が行われるよう指導し，イノシシ等による農作物への被害低減に取り組む必要がある。

3 活動内容

(1) 農地の維持と耕作放棄地解消対策

ア 人・農地プランの周知徹底と農地マッチングに向けた対策検討及び実践

関係機関による定例会を開催し，活動計画の検討を行った。また，農業委員，最適化推進員と意見交換を行った。

説明会や各組織総会において，人・農地プランのねらいや内容等の説明を行った。また，新規中心経営体2名に人・農地プランに関する意見の聞き取りや農地利用の意向調査を行った。

人・農地プラン検討会では，「耕作放棄地を少なくし，農地を守るには？」をテーマに分科会方式で話し合いを行った。



<農委・推進員との意見交換>

イ 放牧組織の設立及び活動支援

肉用牛農家3戸で放牧組合を設立し，電柵設置作業を組合及び関係機関と共同で行った。

耕作放棄地（約30a）に7月12日から8月15日（35日間）まで，繁殖雌牛を2頭放牧した。

矮性ネピアグラス草地（約40a）に7月22日から10月20日（91日間）まで2頭放牧した。

また，他の矮性ネピアグラス草地（約30a）に12月27日から2月8日（44日間）まで2頭放牧した。

矮性ネピアグラスは一度植え付けると永年牧草として活用できるため非常に有益な牧草であるが，収量が多いことから収穫作業に労力を要するという欠点もある。

そのため，放牧により牛に直接食べさせることで，収穫作業の労力低減が可能か検討した。



<電柵設置作業>

ウ 果樹重点品目の生産性向上支援と栽培環境改善支援

小みかんの産地継続を目的に、農林、農協と課題整理を行った。高齢化が進み、管理不足の園が多いことや新規就農者が少ない状況であるため、栽培と労働力に関するアンケートを実施した。

また、小みかん栽培の省力化を図るため実証ほの設置と調査を行った。

せとかは生産安定を目的に裂果対策実証ほを設置した。土壌水分値、果実肥大調査、果実分析をもとにかん水指導、摘果指導を実施した。



<土壌水分値による指導>

エ 桜島大根の振興方策の検討

品質の優れる県育成桜島大根「桜島おごじょ（旧：鹿児島5号）」の、桜島地域での栽培面積を拡大する前提として取り組んだ採種栽培が順調に経過し、ある程度の種子数が確保できたことから、地域への波及方法について関係機関・団体と検討、具体的な取組を進めることとなった。

桜島大根はその生産量のほとんどが漬物加工用に出荷されることから、まずは6月に漬物等加工業者を対象に品種特性についての説明会を開催、新しい品種が導入・栽培されることをPRした。8月には既存大根栽培農家への説明会を開催し導入推進を図った。

一方、次年度以降の種子を確保するための採種栽培については、これまでの技術を反映させて10月に農業開発総合センターがとりまとめた「採種栽培マニュアル」に従って次年度種子生産の開始を支援した。

加えて、「桜島おごじょ」の高品質を生かした販売拡大の課題に対し、JAと経済連が連携した取組を開始しはじめたところである。

しかし、期待を集めた「桜島おごじょ」は、例年のない温暖な気候による生育促進と一時的な多雨により早まきしたほ場で収穫を目前に生育障害が発生し、一部では収穫皆無となるなど不安定な生産となった。このため、1月には生育障害の発生要因と対応策についての説明会を開催し栽培意欲の維持を図った。



<受粉前の現地検討>



<農家への品種特性説明会>



<実証ほ現地検討会>

(2) 有害鳥獣による農業被害の軽減

ア 栽培環境改善支援

(2) 有害鳥獣による農業被害の軽減

電気柵メーカー担当者による電気柵の仕組みから安全で効果的な設置に関する室内研修会を1回(8/23)、県鳥獣被害対策アドバイザーと電気柵メーカー担当者による現地研修会(ほ場を巡回しながら電気柵の設置・管理チェック表に基づき個別指導)を3回(10/28, 11/2, 24)開催した。



<現地研修会>



<現地研修会>>

4 活動の成果

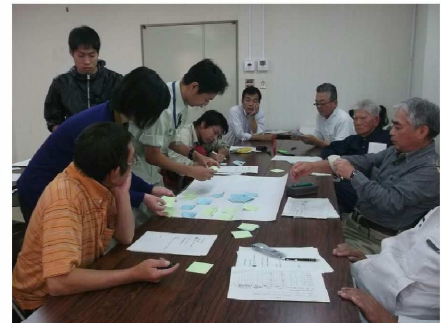
(1) 農地の維持と耕作放棄地解消対策

ア 人・農地プランの周知徹底と農地マッチングに向けた対策検討及び実践

説明会や各組織総会等の場を活用し、人・農地プランを周知した。また、新規中心経営体の農地利用の意向等を個別に聞き取り、情報共有を図った。

農業委員、最適化推進員との意見交換会では、農地賃借に係る情報共有を進めることや鳥獣対策、耕作放棄地対策等についての意見が出された。

人・農地プラン検討会の分科会では、農地情報のネットワーク化、農地の集積等農地課題への提案や労働力補完の取り組み等活発な意見が出された。今後、話し合いを継続することとなった。



<分科会>

イ 放牧組織の設立及び活動支援

耕作放棄地を活用して放牧を実施することで耕作放棄地の有効活用ができた。

また、矮性ネピアグラス草地を活用した放牧は、長期間放牧が可能であったため、購入粗飼料の低減や飼養管理の省力化につながった。

草丈の高い箇所も問題なく牛が摂食することができ、栄養状態も良好だったため、桜島地域では有効な放牧形態と思われた。



<放牧状況>

ウ 果樹重点品目の生産性向上支援と栽培環境改善支援

小みかんは、課題整理をもとに関係機関・団体と役割分担と年次別計画等を作成した。また、アンケート結果をもとに定年帰農者のリスト化を行った。

省力化を目的とし、摘果剤を活用した摘果実証ほを設置した。2系統の小みかんで実施したが、1系統では効果が見られたもののもう1系統では効果が低かった。普及性について関係機関・団体で検討したが波及は難しいと判断した。また、幼木での花芽抑制を目的とした冬期ジベレリン散布実証は、花芽抑制効果が高く、省力化技術として有効な方法であることが分かったため、出荷協議会の場で生産者へ説明を行った。

せとかは、かん水指導、摘果指導を実施した結果、昨年度よりも裂果はやや減少したが、その他要因もあり、目標単収は達成できなかった。

エ 桜島大根の振興方策の検討

「桜島おごじょ」の品種特性説明会に生産農家の過半を超える19名が参加，出荷時規格の均一性や空洞症が出ない高い品質に興味が集まり，農家16名で1ha分を超える種子注文となり，加工用に向けた面積拡大がスタートできた。

現地での採種栽培は2年目となり，農開Cの支援を受け目標の採取数を概ね達成し，次年度以降ストック分を含めた種子数を確保できた。また種子の生産効率を上げるための採種マニュアルに沿った栽培様式等を次年度用採種栽培で導入できたことで，次年度用種子生産も十分な量を確保できる見込みである。

一方，収穫目前の生育障害の発生に対し農家の不安感が高まったが，発生要因と発生軽減対策技術説明会の開催により払拭できたものと思われる。



〈桜島おごじょ推進ポスター〉

(2) 有害鳥獣による農業被害の軽減

ア 栽培環境改善支援

室内研修会には27名，現地研修会には15ほ場で20名が参加した。

現地研修会では室内研修会だけでは伝えきれない，ほ場に合った具体的なアドバイスができた。

5 今後の課題

(1) 農地の維持と耕作放棄地解消対策

ア 人・農地プランの周知徹底と農地マッチングに向けた対策検討及び実践

プランの実現に向けた話し合い活動

農地マッチングに向けた農地賃借情報の収集方法の検討

イ 放牧組織の設立及び活動支援

耕作放棄地を活用した放牧面積の拡大

ウ 果樹重点品目の生産性向上支援と栽培環境改善支援

生産者を含めた産地維持に向けた話合いと対策検討

エ 桜島大根の振興方策の検討

採種ほ設置の継続支援

J A・経済連が進める販売拡大に併せた産地拡大支援

生育障害の発生を抑制する栽培技術の早期確立

(2) 有害鳥獣による農業被害の軽減

ア 栽培環境改善支援

農業者がほ場に設置する電気柵等の適切な設置と管理の指導継続

6 農家の声（評価）

- ・桜島地域を活性化するために，今後組織化を図るべきだと思う。また，そのためには農家のリーダーと行政の協力が必要だと思う。
- ・矮性ネピアグラスの放牧は，長期間放牧ができるため飼養管理の手間が省けて良かった。

7 担当した普及職員（〇はチーフ）

田代（一），長谷場，川野，〇石原